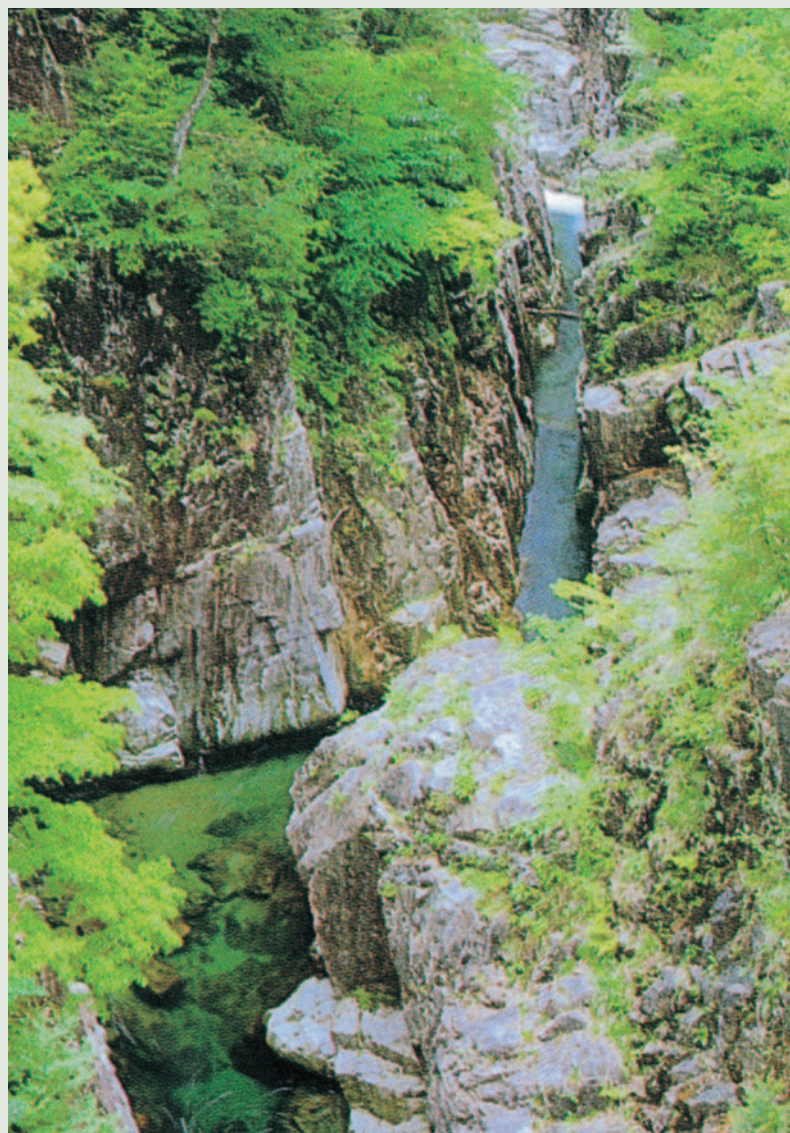


木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
春号は板取川の源流、板取村から、
村の活性化に励む元気な人々の活躍を中心に、
歴史ドキュメントでは、河川交通第一編として、
木曽川水系の材木流送を特集します。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《板取村》

◆水と緑あふれる源流の村 板取村

AREA REPORT

◆板取HUMAN WATCHING
—新しい地域社会のカタチを造る—

気ままにJOURNEY

◆板取HUMAN WATCHING
—美しい自然環境を、守り、楽しむ—

歴史ドキュメント

◆木曽川水系における材木の流送

TALK&TALK

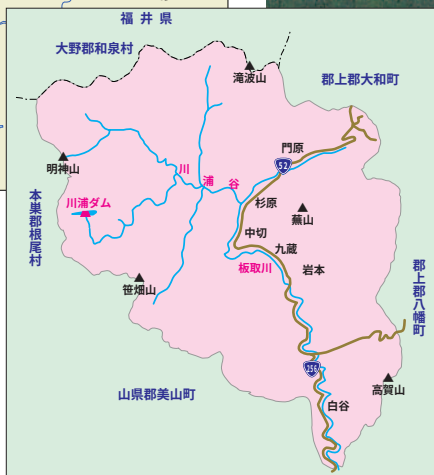
◆木曽川における御神木の流送

民話の小箱

◆海水山権現

水と緑あふれる源流の村板取村

板取村空撮



板や包丁などのほか、耳栓や黒曜石の耳飾りなど、当時の暮らしをしのばせる遺物が多く出土しています。中でも、木の葉の形の石と矩形の石を並べた組石は、磁針で測



中平住居址内の不思議な組石

村の歴史が始まったのは縄文時代、門原地区中平では、縄文中期の方形竪穴住居跡が発見され、石のまな

板取村は、福井県大野郡と境をなす急峻な山岳地帯に囲まれ、標高は20mから1456mに及んでいます。村の総面積の88%を林野が占め、中央部を板取川が南北に貫流しています。北から南に細長く展開する地形で、農耕地や集落は板取川流域に点在し、全域にわたってV字型急傾斜地帯を形成しています。

白山信仰と板取

つてみると木の葉の石は北を、矩形の石は西を指しており、太古の昔はこうして正しい方向を調べたのでしょう。この他、全村から石器が発見されており、杉原地区の遺跡からはメインクルと呼ばれる信仰の遺物も出土しています。



老洞区土地柵の木地屋敷跡

木地師は五世紀ごろ帰化人がもたらした口クロの技術を応用し、木地製器を製作した職人です。彼らは漂泊の職工集団で、木地製品の需要が増すにしたがい、原木を求めて全国の山地を移動していました。その第一波の移動が行なわれたのが、平安末期から鎌倉初期、板取の九

木地師が開いた村

伝説によれば白谷観音は、白山を開いた泰澄大師の創建で、本尊は行基菩薩の自作。大師は山から白い砂が流れ出しているのを見て、この谷を白谷と名づけたと言伝えられています。

平安末期には白山山頂の主神も各馬場の下山七社も比叡山延暦寺の支配下に置かれるようになると、白山にも天台山伏らが修行に訪れるようになります。この修行の途中、山伏は神のお告げを感じたところで経家を造り、神鏡や神剣を捧げ、里人に神社を建てさせたりしています。板取村でも、野口と中切から鏡や経文を収めたと思われる壺や刀が発見されています。この天台山伏が創建したと伝えられるのが、白谷観音と海水山権現で、両方とも十一面観音を祀っています。



大非山円教寺(白谷観音)の本尊

西濃名門、長屋氏と戦国時代

中世末期になると、守護土岐氏に仕えていた長屋信濃守は、土岐氏滅亡の後、斎藤道三に仕えて板取村に居を構え、田口城を築城しています。天文年間（一五四〇）の出来事で、守護土岐氏を滅ぼして美濃を国盗りした道三ですが、弘治二年（一五五九）にはその子義竜との長良川合戦で討死。信濃守は義竜方として参戦し、一族の長屋甚右衛門が討死しています。文禄三年（一五九四）、板取一帯を領土としていた長屋一族は、上知（美濃市・鉾尾山城主佐藤氏と合戦し、ついに田口城は落城。代わって板取を治めるようになった佐藤氏は、かほれ山、うんのみづい、ひらの山を山年貢（山の税金）一石で岩本村長屋市蔵にあずけ、慶長三年（一五九八）には板取村の年貢を錢一五貫文、綿二両、鷹の巣を毎年、一巣ずつと定めています。その後、板取村は一四集落となり、各村落は入会山を有し、山年貢も各村の名で出されるようになりました。



史跡田口城跡

厳しい山村の生活

佐藤氏が関ヶ原の合戦で西軍に属して滅びた後、板取村は金森長近の所領となり、その後幕府領を経て尾張藩領となりました。

村の農業は畑作中心で、ムギ、ヒト里イモの他、アワ、キビ、大豆などが中心でした。田は用水路が引かれているのが半分で、後は天水に頼っている状態だったので、寛延四年（一七五二）にはタラガ谷から葦瀬の間に、寛政八年（一七九六）には瀧波川オクダから下中根の間に用水路が完成しています。

板取村の山林から木材が伐り出されたのは随分昔からで、文禄三年（一五九四）には山年貢を上納し、自由に材木を伐採することが認められました。

山村では田畑の少ない者、ない者は生活を山に頼るほかなく、山の日雇い、杣、炭焼き、雑炊など生活の糧を得ていました。

炭焼きの始まりは、上ヶ瀬の清左衛門が大坂夏の陣の工夫に倣用された折り、戦いが怖くて紀州の山に逃れ、そこで炭焼きを修得。松根で炭を焼いたのが始まりと伝えられ、松根に宗貞（清左衛門の法名）の地名を残しています。その一方、木材は白谷から筏にして岐阜まで運ばれたので、白谷では農業と筏乗りを兼業している者もいました。

河川を利用した材木の流送は、三月から九月までが一番多かったのですが、文政九年（一八二七）、長良の鶴匠が、材木の流送により鮎の餌である藻が損傷するから止めて欲しいと尾張藩に提訴しています。出材者と鶴匠の抗争は以後、五年間続き、ついに冬の期間だけ材木を流送することで、決着しています。この他にも洪水による流失や盗木など、材木の流送はさまざまな問題を抱えていたようです。

農民が勝利した留山騒動

正徳二年（一七一二）、尾張藩は板取山・洞戸山を留山とし、材木、薪の切り出しを禁止しました。薪がなければ炊事もできませんし、収入も途絶えます。そこで庄屋・金右衛門ら五人は岐阜代官所へ行き、さしあたり炊事用の薪をとる許可を願い、これはすぐに許可されました。しかし、板取村の多くの者は山稼ぎで生活をしているため、大勢が飢えに苦しみました。たまりかねた百姓は岐阜代官所へ強訴、庄屋の金右衛門は尾張藩へ直訴しました。強訴・直訴は死罪になる時代です。命を賭した訴えは藩主の心を動かさず、留山は解除、飢えている百姓には金（〇両）を、翌年にはさらに三四両を板取村へ下り渡しています。この事件は、市川甚左衛門という役人が、自分の才能を認めてもらうため「板取山などを留山にする」と名古屋城の台所の薪や炭八年分がとれると藩主に進言し、村々のありさまを知らない藩主の許しを得たのが始まりでした。

天保飢饉の惨状

天保五年（一八三四）、板取村に寒波が襲来し、ヒエも実らない状況でした。天保七年と八年は二年続きで、一滴の雨も降らず川は干上がり、山の木の葉も夏だというのに赤茶けて、田畑は全滅のような状態でした。このころには全国的な天保の飢饉の影響で米の価格が急騰。板取村では九戸四七五人が乞食となり、木の葉や草の根をあさる惨状でした。本巣郡の根尾谷ではシロをほぐして食べ、それもなくすると餓死する人もいたようです。救済策として、天保五年八月、尾張藩から板取村へ窮民一人あたり、ヒエ、ムギあわせて一斗と銀一匁五分が支給されました。

明治時代の交通網整備

版籍奉還が実施された明治時代、板取村は名古屋を経て岐阜県に所属しています。明治二三年には現在の地域の板取村が誕生しています。村の生活はほぼ江戸時代の延長で、薪炭や生糸、茶などを越前方面へ出荷していました。滝波山越えの険しい道がこの主要交通路であったため、明治一〇年、越前富田の櫻木治郎右衛門、板取村の長屋伊輔が中心となり、百数十両の寄付を募り、この山道を修復しています。また、明治一九年から四〇年にかけて板取街道を整備しています。こうした道路網の整備が実施されると、製炭業が盛んになりました。

金原明善の植林指導

明治初期の板取村は、広大な山林を私有していた長屋治左衛門は別格として、ほとんどの山は組ごとの入会山（共有林）で、私有林所有者はごくわずかでした。当時、日常生活に必要な薪は入会山でとればよく、造林するという考え方はありませんでした。明治三五年、金原明善が板取村を訪れ、植林を奨励しています。金原明善は山村を行脚して養蚕、植林、牧畜などを奨励し、天竜川改修事業を行なうなど、治水事業に貢献した明治の偉人です。彼の指導により板取の造林が有望であることがわかった村人

は入会山を分けて私有林とし、植林を始めた集落もありました。また行政による私有林化への指導もあり、大正年間にはすべての区有林は区民に分配されて私有林となり、植林も盛んになりました。

変わりゆく板取村



オートキャンプ場

第二次世界大戦後の近代化に伴い、板取村でも人口の都市流出が激しくなり、村は過疎化の一途をたどるようになってきました。また、相次ぐ電力開発に伴い製炭業も衰退しました。その一方、戦後の経済成長にしたがって観光が盛んになると、板取村でも山や水の美しい自然を利用して観光の事業が始まりました。村内にキャンプ場や民宿、養鱒場などが相次いでオープン。近年には、「21世紀の森公園」「あじさい園」「魚の里」「はたるの里」などが続々と整備されており、現在は板取スイス村構想やまの・あたらしい・むら／くら／ひとを理念に掲げ、板取村の恵まれた豊かな自然の中で、質の高い豊かな生活を心豊かな創造力あふれた人が躍動する美しい村づくりをめざしています。



21世紀の森公園

参考文献

- 『板取村勢要覧』二〇〇〇年 板取村
- 『板取村史』一九八二年 板取村
- 『郷土板取のあ・ゆ・み』一九八三年 板取村教育委員会
- 『板取スイス村構想』一九九七年 板取村
- 『岐阜県地名大事典』角川書店



あじさい寿司

板取

新しい地域社会のカタチを造る

HUMAN WATCHING

水と緑が美しい板取村
この豊かな自然の財産を未来へ伝え
活力あふれた村にするために、
がんばっている人々の声を集めました。



水車



地下発電所



川浦調整池

自然が大好きだから「アイターン」。
森のステージは僕が育てる。

森林組合 根本 康さん

くれます。

休日にはカメラをもって山へ入りますが、でもまだその全貌はつかめない。生涯、僕はここに根を下ろすつもりでいます。



根本 康さん

森林組合の作業班は現在九名。その内、五名は「アイターン」いわゆる都会育ちの田舎志向という人々です。その中でも三名が横浜出身者ですが、縁があるのかも知れません。板取に来て八年が経ちますが、僕の担当は下刈り。杉の苗を生育させるために雑木を伐採する仕事です。八年前の苗木がもう僕の身長を軽く越えています。

この苗木が成長し商品になるまでには百年の歳月が必要で、僕の寿命を越えているわけですから、その点は遠慮し。仕事が終わってきたかどうか、見届けることができません。今は下刈り専門ですが、いずれは枝打ちができるような、立派な職人になりたいですね。

自然と共生しながら、
新しい電力を生み出す。

平成一九年完成予定の川浦水力発電所は最大出力二〇万kwです。現在運行している奥美濃発電所の最大出力一五〇万kwとあわせて二八〇万kw供給できることになり、これはピーク時の岐阜県全域の電力をまかなうことができる量となっています。発電所は板取村川浦地内の地下に設け、山腹を貫く水路によって、上部調整池と下部調整池を結び、この水路で最大毎秒二七〇mの水を発電所へ導水して発電するという揚水式を採用しています。この揚水式発電所と火力、原子力発電所を組み合わせることで、電力の需要の変化に対応することを目的としています。

私自身、三重県・山奥で生まれ育っておりまして、大学でもワグネル部に所属、山をこなく愛する自然保護派です。できれば自然はそのままで残したいのですが、電力開発も社会にとって重要なことです。だからこそ、自然と共生できるような、もしくは最小限に環境変化を抑えるような計画が大切です。特に、板取は、太公望が憧れる鮎のツカです。水質の美しさはかけがえのない財産です。こういう工事の場合、岐阜県の条例では、水質は二五・三〇ppmに抑えるようになっていますが、中部電力ではそ

川浦水力建設事務所長 近藤 寛通さん



近藤 寛通さん

れを五ppmに抑ええる水質汚濁防止対策を徹底しています。また土捨場も将来は緑化をしてお返します。現在建設中の上部調整池は、山の頂上であり、地質も岩盤ですから、今、ダムが抱えている排砂問題の心配もありません。川から流れ込む土砂がないのですから。その一方、工事にあたって重量物や資材を運搬しますので、村内の道路もすべて五m幅に改良します。板取には銚子の滝という美しい名所がありますが、ここの林道も遊歩道やトンネルなどに整備、村の観光事業のお手伝いになればと考えています。

また、川浦発電所は地下五〇〇mの地点に岐阜県庁がすっぽり収まる地下洞を造り、地下水車を設置しますが、それも観光客の見学コースとする。地域との共存、自然との共生が、中部電力の使命です。そのために最大限の努力を払う。これが私の役割。板取は「ユア・アジア・ドジョウ」など、川の幸も豊島。この豊かな自然を守るために、工事に細心の注意を払っています。



山林従事者



杉の下の枝打ち

大好きなタワガタやカブトムシもたくさんいますし、時にはサルやイノシシに出会うことだってある。でも村の人たちはみんないますよ。「人間の方が怖い」って。

板取は南北に長い地形で、「分けいても分けなくても着い山。山頭火ではありませんが、実に奥が深い。いつも違った表情を見せて

AREA REPORT



板取老人福祉センター全景



板取老人福祉センター玄関



介護用風呂

パラフィン風呂



アジサイロード



あじさいまつり

真知子さん 看護婦としてデイサービスセンターを利用される方のお世話をしています。ここが完成して三年になりますが、PR不足なのでしょいか、まだまだ利用者は少ない。昔からの風習で人様の世話になてはいけないという遠慮も大きく影響していると思います。

里美さん でも重い腰を上げて初めてこへいらつしやると、来て良かった。

真知子さん こんないいところだったら、もっと早く来た良かった。

里美さん お風呂も恥ずかしいという抵抗があるようですが、実際入ってみると気持ちいいなあつて。

真知子さん 徘徊する痴呆老人の方もいらつしやいます。板取は三人に一人が高齢者だけに問題も深刻です。でもまだまだ理解が浸透してません。家族がお世話して当たり前という風潮は根強いですね。

里美さん でも実際こへいらしたおじいさんは「まだかまたかつてデイサービスへ来る日を楽しみにしていらつしやい



長屋真知子さん(左)と長屋里美さん(右)

ます。普段はテレビの前でボツとしていたのですが、こへ入ればみんなと食事でもできる。会話ははずむ。今日のメニューはロールキャベツでしたが、みんなといっしょなら嫌いなものでも食べられるよつになる。自宅にいればわがままになりがちなお年寄りですが、やっぱりみんなといっしょに刺激になるのしょうね。生活にもメリハリができるよつですよ。この一日のスケジュールはまずお迎えに始まり、到着したらすぐバイタルチェックをします。

真知子さん これは血圧と脈と熱を測るという健康状態のチェックです。

里美さん そして、お風呂に入っていたんですが、この時、爪が伸びたら爪を切つたりね。後は好き好きでリハビリされる方もいます。その後、手作りのお食事を楽しんでから休憩時間。最近たつとも用意しましたが、そこでおしゃべりしたり、カオケをきいたり。今日も一八名いらつしやいましたが、皆さん満足して帰られました。

真知子さん お風呂も最新のバリアフリータイプを用意していますから、皆さんくつろいでみえるよつですよ。こんな立派な施設を板取村は用意しているのですから、お年寄りの皆さんにはぜひ積極的に利用していただきたいですね。

三人に一人がお年寄りの村で、快適なシルバークライフを応援します。

看護婦 長屋里美子さん
看護婦 長屋真知子さん



長屋 政次さん

アジサイクラブに入つて一〇年になります。最初は少しお手伝いをするだけと思つたんですが、だんだん役を任せられ

手入れや剪定はむずかしいけれど、アジサイロードは私たちが守ります。

アジサイクラブ 長屋 政次さん

やつて、今では副会長です。

アジサイロードは、昭和五一年頃から「村にアジサイロードをつくらう」という当時の村長の呼びかけで始まりました。村内の道路二五kmにアジサイの花を植えたんですね。で、この美しい花を老人クラブでお世話しよう。いのまにか花の手入れや清掃を自主的に老人クラブで行なうよつになったんです。それなら名前も変えてしまえといつことで、老人クラブからアジサイクラブへと名称を変更しました。でも、やっぱり生きている花ですからね。剪定は難しい。名古屋から講師の先生をお招きし、手入れや剪定を教えてもらいながら、みんなで協力してやっています。名古屋の先生もこんなにたくさんアジサイが咲いている地域は珍しいとほめてくれていました。「あじさい寿司」という板取の名物も生まれました

しね。薄紫の彩りを生かし、川魚や山菜をあしらった押し寿司は人気ですよ。

季節になると、約七万本のアジサイが咲きこぼれそれはにぎやかです。村外から大勢の観光客が訪れて村全体が華やきます。そのころになるとあじさいまつりも行なわれます。二世紀の森公園をメイン会場に、シヨや模擬店など楽しいイベントが盛りださん。板取は山も水もきれいだね、アジサイも美しいね。そんな風に言ってもらえるよつに、これからはがんばります。



アジサイロード清掃

板取

美しい自然環境を守り、楽しむ

HUMAN WATCHING

板取村は憧れの観光スポットです。釣りやキャンプ、山菜採りなど、アウトドアライフを楽しんでもらうために、環境を守っている人々の声を集めました。



白水の滝



水あそび



おばちゃん館



いもち



あじさいまつりで熱演する株杉太鼓



青空に響く株杉太鼓

美しい自然を案内するガイドさんは
アウトドアライフを守る森の番人。

自然保護指導員 長屋 盛重さん

板取には野生のシクナゲやサツキが群生している場所がありましてね。それは何事なものです。でも、心ない人たちが盗んでいってしまうこともある。たゞ盗んでいっても地場が違つので、一年もたない。枯れてしまふんですよ。だからそのままにしておいてほしい。自然保護指導員は、そんな美しい自然環境を見張る番人のようなものです。番人といえは厳格しくて恐ろしいイメージがありますが、逆に自然のガイドでもあるんですよ。私は三年前から自然保護指導員をしていますが、同時に砂防監視員もしています。土砂崩壊などの危険がないか見て回るんですよ。だからほぼ毎日、板取や洞戸、美濃の山や川を回っています。それだけに、この辺りの自然は手に取るようにわかっています。マイタケは古木の根本に生えているけれど、危険な場所にあるとか、ヤマやアマゴのスポトも知っています。だからこそ板取へいらっしゃる人々には、私達を上手に利用

してほしい。板取の村をもっと楽しむために、今はどんな野生の植物が咲いているんだとか、どんな溪谷を登ってみたいけれど、危険はないかなと、私たちにどんどん質問してほしい。そうすれば、もともと川や植物に親しむことができる。必ず、板取のファンになつてもらうことができる。私たちがそのためのエスコートをしているようなもの。白山や越前山々が眺望できるスポットも知つてますよ。この写真で私を覚えてください。声をかけてください。板取の美しい自然をご案内しますよ。



長屋 盛重さん

ふるさとの味を召し上げ、
おばちゃん館

長屋あつ子さん
長屋清子さん

長屋えみ子さん
鈴木幸子さん

あつ子さん、おばちゃん館は、門原地区の年寄りが集まって、おいしいものを食べてもらう観光施設です。板取に伝わるイモモチなんかをね。これは里芋と米をいしよに炊いてモチにしたものを、炭で焼いて食べる。しょうがじょうゆが香ばしくておいしいですよ。

清子さん、山菜の季節には、フチやワラビを炊き込んだ山菜御飯も用意しています。山菜は採りにいくんですよ。板取の渓流には、たくさん自生していますから。

ちえ子さん、私は手打ちソバを担当しています。が、腰を痛めてしまつて辛い。でもお客さんにおいしい、おいしいで喜んで食べてくださる笑顔が忘れられなくて。今年もやっぱりがんばるかな。

鈴木さん、お客様はあちらこちらからいらつしや

危険箇所も禁漁区も事前に把握して、
大いに釣りを楽しんでください!!

支流川増殖組合 太田 泰芳さん



太田 泰芳さん

で禁漁区を設けています。水質保全と魚の枯渇を防ぐためにもね。谷川の水は村の飲み水でもあります。この水質を保つため、魚に虫を食べてもらう。これが水質浄化につながるんですよ。自然は循環していますから。

私も釣りが好きで年に何度かやります。エサはミミズがイクラ、ブドウ虫。水生昆虫でもよく釣れますよ。フライやルアーが好きなのために、専用の渓谷も用意しています。ただしキヤッチ&リリースが基本。でも、フックの針だと傷がついて死んでしまつこともありますから、フックはヤスリでなんかに取つておいてもらいたいですね。

太田さんの皆さん、安全で楽しく釣りをしてもらつたために、僕たちはアドバイスを惜しみません。各集落に組合の取扱所がありますから、釣りを始める前には必ず顔を出して、禁漁区や危険箇所の確認をしていただきたいですね。

支流川増殖組合板取管内本部 05581157211



(左から)長屋あつ子さん 長屋清子さん 長屋えみ子さん 鈴木幸子さん

板・取・村・の・歳・時・記

◆グリーンフェスタ/とちの木まつり◆

5月3日・4日



毎年ゴールデンウィークに、まぶしい新緑の中で行なわれるグリーンフェスタ。とちの木まつりをはじめとして、村全域が会場となつてさまざまなサービスやイベントが行われます。勇壮な株杉太鼓も大人気。人々のかけ声を合いの手に、祭りを盛りあげます。

◆世界選手権バイクトライアル日本大会◆

8月下旬



トライアルのメッカとしても有名な板取村では、8月下旬に実施される世界選手権大会をはじめ、世界中のトライアルファンが注目する競技大会も実施されています。「21世紀の森公園」の一角にあるオット・ピ・パーク(バイクトライアルテーマ館)にはフリー走行が楽しめるコースも設けられており、観光客の人気を呼んでいます。

板取村 EVENT INFORMATION

- グリーンフェスタ 5月3日・4日
- あじさいまつり 6月下旬
- 元気なふるさとITADORI夏まつり 8月下旬
- 世界選手権バイクトライアル日本大会 8月下旬
- 産業祭 11月初旬
- 元気なふるさとITADORI冬まつり 2月中旬



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋 R22 岐阜 R256

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋 JR東海道本線(約25分) 岐阜 岐阜バス(約80分)
名古屋 名鉄本線(約25分) 新岐阜 岐阜バス(約80分)

●お問い合わせ●

◆板取村役場 〒501-2901 岐阜県武儀郡板取村1643-17
TEL0581-57-2111 FAX0581-57-2135
ホームページアドレス <http://www.vill.itadori.gifu.jp>

気ままにJOURNEY

太鼓という形になりました。とはいへ、きっかけは平成五年に、村役場が太鼓を購入したため。じゃあやってみようかと。そんな軽いノリでした。練習を重ねる内に、太鼓の魅力にとりつかれたのが今のメンバー。男性三名、女性七名、合計一〇名のグループで、株杉太鼓保存会を発足させました。株杉というのは、全国的にも珍しい杉で一本の杉が地上二・六mくらいの高さで株分けされています。蕪山の中腹に七〇株ほど群生しています。枝ぶりといはんと見事なものです。その株杉をもっと多くの人々に知っていただくために、保存会の名前にしたんです。

練習日は月曜と水曜の週二回。郡上郡の高鷲村から太鼓の先生をお招きしています。保存会が発足してまだ二年。最初は聞いたものではありませんでした。でも地道な練習を続けるうちに、これならいけるという感触をもたれたのは一年くらい経ってから。年四回開催される板取のイベントには、必ず出場しますが、村の人たちからも上手くなつたなあ、とよく褒められるようになりました。



長屋 馨さん

どういうわけか、板取には郷土芸能が伝承されていらないんです。その昔、神楽を伝える集落もあったのですが、それも途絶えてしまつて。だから、私たちの手で郷土芸能を生み出そう、そんな思いが株杉

オリジナルの演目は、木霊です。朝日を浴びた木々や緑を浮かび上がらせる風、そんな板取をイメージした曲です。株杉太鼓は、太鼓の乱れ打ち横打ちなど、太鼓ならではの響きを自在に取り入れており、見ても聞いても楽しい。今、僕はこの太鼓を小学校で週一回教えていますが、子どもたちは呑み込みが早い。そんな子どもたちが育て、ああ僕たちの村の太鼓だ。そう想ってもらえるような郷土芸能に育てたいですね。そのためには全国の大会に出場して武者修業を積んで、株杉の名も太鼓の名前も全国の人々に知っていただきたいと願っています。



板取川



フィッシング

アユを取り巻く環境は深刻です。清流といわれる板取川も、水の量がずいぶん減つて、淵が少なくなつてきています。魚は瀬と淵があるからこそ元気に成長する。淵の減少は昭和三四年の伊勢湾台風が大きく影響しています。山地崩壊で淵が埋まってしまうんです。そのダメージからなかなか抜け出せない。冷水病という、いわば成人病のような病気もアユに蔓延しています。ね、この病気、ストレスが原因なんです。アユにとって深刻な現況だからこそ、漁協が棲息しやすい環境を守ってあげないと、工事の汚水やゴミが川を汚染しないように、厳しく見張っています。

ともあれ、いろんな人たちにアユ釣りの楽しさを味わってもらいたい。奥が深いアユ釣りですが、女性や高齢者の方にも気楽に釣りを楽しんでもらおうと、去年からアユ釣り講習会を開催しています。講師の先生が親切丁寧にご教えてくれますから、去年は大好評でした。今年も開催しますので、アユ釣りに興味のある方はぜひ、詳細は下記までご連絡ください。

板取川上流漁業協同組合

0581-58-2134

自分たちが生み出した株杉太鼓を
新世紀の郷土芸能に!!

株杉太鼓保存会会長 長屋 馨さん

アユ釣り講習会を今年も開催します。
ビギナーでもお気軽に参加ください。

板取川上流漁業協同組合 日置 香さん



日置 香さん

特集

河川交通とその歴史

第一編

木曽川水系における
材木の流送

川の恵みは作物を育て、生活を潤すだけではなく、人や物資を運ぶ川の道として、重要な役割を果たしていました。特に、現代のような交通網が整備されていない時代は、材木や米などの大量輸送を低価格で実現。まさに、物流の大動脈であったといえます。そんな河川交通の歴史や役割をシリーズで特集。今回は木曽川の材木流送を中心に紹介します。



九年（一八三八）、愛知県海部郡諸古村満蔵寺（現在の佐織町・津島市）で発掘されたクスノキの割舟です。これは「三三」という大判割舟で、製作年代は古墳時代。伊勢湾沿岸あるいは木曽川の物資輸送の役割を果たしていたと思われる。大友皇子が覇権を争った壬申の乱（六七二）においては、美濃地方も戦乱の舞台となっており、大海人皇子の進軍ルートにはかつての公道（東山道）をつなぐように流れていた木曽三川を利用、舟で渡ったと思われる。

曾山と木曽川の一元支配を実施して、何もかも焼失した戦国時代からの再生、いわゆる大建造事業にあたり、膨大な材木と輸送手段を同時に確保することに成功しています。この政策を踏襲したのが、江戸幕府を開いた徳川家康です。

慶長二年（一六〇〇）の江戸城、同一二年の駿府城、同一五年の名古屋城の修築・建築をはじめとした、全国的な城下町の建設・発展に伴い、材木の需要は高まる一方、その時代にあつて木曾山は、材木の一大供給地としての地位を確立していきまし。当時、木曽川を流送して名古屋に送られた材木は、年間約百万本ほど。この膨大な材木の運送を美濃や信濃の役人、人足だけではまかないきれなかったため、京の豪商で知られる角倉了以などの技術や資金の援助のもと、杣（きり）や日用（にちよう）人夫が木曾山に入り、材木の伐採・搬出にあたりました。

木曾式伐木運材法

水量に恵まれた木曽川は、近世の運材河川を代表する河川です。天正年間（一五七二～九一）の大洪水で木曽川の流路が変わり、ほぼ現在のような姿になってから、「木曾式伐木運材法」と呼ばれる材木の流送体制が確立しています。これは、木曾の急峻な地形と河川を利用

して材木を搬出する方法で、支流を白や修羅（しや）を使うて流すのが小谷狩り、木曾本流を利用した運材を大川狩りといひ、木曾山で伐採された材木を一本一本管流し（二本流し、バラ狩りともいう）をしていました。この管流しされた材木を留めて杣に届くのが綱場です。木曾川本流では美濃の錦織湊（岐阜県八百津町）に綱場が置かれ、そこで編束された杣は、下流の犬山・円城寺・岐阜県笠松町で中継されて桑名や熱田白鳥へ流送されました。この運材方法の特徴は、材木をそのまま運材施設や水運機構に用いながら作業し、貯木場に到着し解体すればほとんどすべてが商品化できるといふものです。

運材の経路とその方法

《山落し》

材木の伐り出しは四月ごろから始まり、一〇月ごろから年末にかけて搬出されます。この時代りだされた材木はあちこちに散在してい

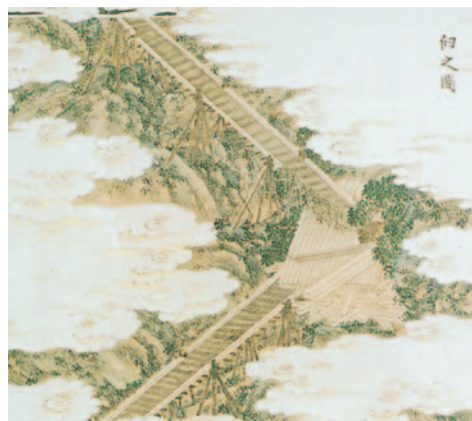


木曾式伐木運材法（南木曾博物館所蔵）

物資や人を運んだ川の道

古い時代から、河川を利用して人や物資を運送する河川水運は、流通の大動脈でした。現在のように鉄道や道路が整備されていない時代、上流から河口まで面々と流れる川の道は、ある時は街道と交わり、川岸に発達した川湊に荷揚げしながら、物流の道として、あるいは情報（けいほう）の道として重要な役割を果たしていました。

河川交通の起源を示す最初の発見は、天保



白の図(長野営林局所蔵)



修羅の図(長野営林局所蔵)



管狩りの図(長野営林局所蔵)

るので、これを谷にまで運び出して一箇所に集める作業を山落しといいます。山落しは、山腹を谷に向かって、主として造材路に沿って設けた搬出路の上を滑らして落とすもので、普通留・修羅・栈手・溜などの材木(道具木で作ったあげた装置を連鎖させ、できるだけ谷川の水を使って、人力と材木の重力で滑降させました。

《小谷狩り》

小谷狩りは、山落しにあて谷川の岸まで搬出した材木を、谷川の水流と装置を用いて木曽川の本流まで運搬する作業です。小谷とは、本流の大川に対する総称で、支流を意味しています。

小谷狩りでは水路となる谷川の川幅、水量、水深、勾配あるいは屈曲などに応じて、自然の川に手を加え、川道を整備したり、特殊な装置を築いたりして材木を流送します。上流は水量がそれほど多くないので、山落しに似た堰と川道を作って滑走し、下流の川幅の広い水量の多い所では、大川狩りと同様に管流しをします。

《大川狩り》

大川狩りとはその名の通りに、相当の水量のある河川で管流しを行なう運材方法です。小谷狩りで搬出した各支流の材木を集め、数万石の二石は約0.28m³の二石の一団を一川分として

流送します。一川の量は川の幅や深さ、あるいは川筋の善し悪しによって異なり、木曽川では普通二〜三万石多い時には七〜八万石を流送しました。

大川狩りでは、小谷狩りのような複合的な装置を用意する必要がありますが、出たが、出水による流失の危険もはらんでいました。また、途中の浅瀬や切り立った川岸などで材木が傷まないよう、岩などを木で囲い込んで川道を作らなければならなかった。

この作業は冬期に、しかも水の中に入って行なうため、川原には濡れた着物を乾かしたり、冷えきった身体を暖めるためのたき火が用意されていました。このたき火の燃料と流送の途中で川底に沈んでしまう材木を小谷狩りや大川狩りで失われたといわれています。

《綱場》

綱場は大川狩りの終点で、ここで集めた材木を檣に組むための固定施設です。綱場としての条件は、川幅が広く、水勢が緩やかで出水時の衝点とならないことに加え、隣



本綱架設中の錦織綱場(昭和36年ごろ)

接した野材と流材防止のための杭所の余地があることです。木曽川の錦織綱場は応永年間(一三九四〜一四二八)に設けられてから、明治時代、鉄道中央線の開通するまで、約五百年間使われていました。

綱場の構造は、強靱な綱を川に渡して上流から流送される材木を受け止めること。一川に数万石もの材木が流されてくるのですから、その綱も十分に耐え得る複合的な構造にならなければならなかった。綱の下手には川原が広がっていますが、不意の出水で大綱から流れ出た材木のかんりの部分が、この川原に打ち込まれた杭によって受け止められました。この袋状の施設を杭所といいました。

《筏運材》

錦織綱場からは川幅も広く緩やかなので、檣に組み、貯木場のある白鳥まで流送しました。

難所の多い錦織〜兼山間は一枚の檣に二人が乗り、もう一人は犬山まで流送。犬山では二枚の檣を連結して一枚の檣に編成し、



錦織を出発する檣(八百津町郷土館所蔵)

犬山の檣乗りによって円城寺湊まで、ここで三〇〜五〇枚の檣を連結して一枚の筏に編成し、数人の筏乗りが白鳥貯木場まで流送しました。

尾張藩の厳しい管理

以上のような経路と方法で材木は流送されましたが、これには、陸送に比べ長大材を大量にしかも割安の運賃を可能にしたという長所があります。その反面、輸送日数が長期化し、不意の出水のために流失したり、盗木されたりという危険性も伴っていました。そのため、木曽川流域住民には川並法度という厳しい制約が加えられていました。まして木曽川は、江戸開幕当初、軍事上の目的から直轄領としたところ、徳川家康から初代尾張藩主に支配が移行してからも、その強権は徹底したもので、元和年間(一六二一〜一六四一)以降においては、無手形の船や筏の通行を禁じ、特に運材過程での「流木の取締は厳重をきわめ、掟にそむく者は、御天領、私領の別なくこれを斬捨てにせよ」と厳達するほどでした。

この木曽川の運材の終焉は、木曽川に大井ダムが完成したとき、ダムにより木曽一帯から錦織綱場への管流しが不可能になり、ここに木曽式伐木運材の歴史は幕を閉じたのでした。



白鳥貯木場(明治後期)

参考文献

- 『川に生きる』 一九九四年 岐阜県博物館
- 『近世林業史の研究』 一九八〇年 所三男 吉川弘文館
- 『愛知の林業史』 一九八〇年 愛知県
- 『岐阜県の林業史』 中巻(美濃国編) 一九八五年 岐阜県山林協会
- 『木曽川水系の河川水運』 一九八八年 松田千晴
- 『南木曽の歴史』 一九九六年 南木曽博物館
- 『日本古代水上交通史の研究』 一九八五年 松原弘宣 吉川弘文館

木曽川における 御神木の流送



松田 千晴 氏
プロフィール

1955年(昭和30年)岐阜市に生まれる。昭和53年、小学校教員となり以後、岐阜市歴史博物館、岐阜県教育委員会事務局図書館建設推進室等を経て、現在は岐阜県博物館勤務。『木曽三川流域誌』(建設省中部地建・平成4年)に執筆他。

1 はじめに

陸上交通が発達していなかった時代、大量運搬手段として利用されていたのは河川の流れであった。

古代にはすでに河川水運が存在したと考えられているが、それが大きく発展したのは幕藩体制が確立された近世のことといわれている。河川水運によって運搬された物資は、材木や年貢米をはじめ多種多様である。

河川水運が大きく発達した背景には、陸上における運搬手段(牛や馬)に比べて積載量が大きく、運賃が低廉といことがあった。

2 伊勢神宮の式年遷宮

木曽川の河川水運を考えると、他の河川には見られない御神木の流送というものがあつた。

伊勢神宮の式年遷宮は、古くより二〇年目に実際に実施されてきた。

ちなみに、式年とは神殿を新しく造るために規定された年限を意味し、遷宮とは新しい神殿に御神体を移すことを意味している。御神木の流送は、この式年遷宮にともなう行われてきた。

3 式年遷宮と美濃の山々

古来、式年遷宮にともなう御用材は伊勢神宮に近い山々から伐り出されていたが、森林資



伊勢神宮の内宮

源の枯渇にともない、他の地域に御用材が求められるようになった。

材木の運搬にあつて、古くは水運に頼る以外に方法はなかった。

そのため、式年遷宮の御用材を伐り出す伐採圏は、必要とされる檜の太木が得られる森林地帯であるとともに、伊勢神宮に通じる水運の便が存在した地域に限らざるを得なかったものと考えられる。

そのような条件を兼ね備えた美濃の山に式年遷宮の御用材を求めることについては、弘安八年(一七八五)の朝議にのぼっている。このときはどのような結論に至ったか定かではないが、興国六年(一三四五)、正平一八年(一三三三)、応安六年(一三三七)には、美濃の山(元禄のころまで木曽は恵那郡に属していた)から御用材が伐り出されている。その後は、江戸時代初期の一時を除いて、美濃の山から式年遷宮にともなう御用材が伐り出されてきた。

ちなみに、美濃の山から伐り出された御用材のうちの御神木は、伊勢神宮の「御正体」である神鏡を奉納するための木箱となる。



御料林での山神祭



御用材木の伐採

4 御用材の伐り出し

「享保御造宮格式御尋記」によると、御用材

の伐り出しにあつては、

①式年遷宮の一〇年前に御仙山の内見を行う。

②式年遷宮の八年前に山口祭(御仙の山口にまします神を祭つて御用材の伐採と搬出の安全を祈る)を行う。

③山口祭が終わると、役人である両頭頭代四人・小工二〇人が入山する。

④山内で役人が木本祭(心御柱の用材伐採にあつて木の本にまします神を祭る)を行う。

といった祭儀が行われていた。

また、昭和四年の式年遷宮の場合には、次のような順序で御用材の伐り出しが行われた。

①大正七年九月から一〇月にかけて林業夫一七人・人夫二二三人によって御用材の原木調査が行われた。

②大正七年一〇月、内務省造神宮使庁職員によって御船代木等の原木の見分が行われた。

③仙夫(恵那郡五組・武儀郡一組・加茂郡一組・愛知県東加茂郡一組と運材夫(恵那郡九組・益田郡二組・武儀郡二組・加茂郡一組・長野県西筑摩郡一組)が雇われた。

④大正八年六月三日、木本祭が西筑摩郡駒ヶ根村の小川御料林において行われた。

⑤大正八年六月四日から八月二五日まで、総計七四四本の造材を完了した。

⑥大正八年七月二日から二九日にかけて、内務省造神宮使庁職員によって造材

の厳重な検査が行われた。

5 御用材の流送

享保一四年(一七二九)の式年遷宮のために享保年間(一七一六〜一七五五)に伐り出された御用材は、次のようにして伊勢神宮まで運ばれた。

①元伐りをして山出しが終わると、錦織綱場で尾張藩役人から造宮役人に引き渡した。

②御用材一本ごとに、錦織綱場で「太」の伐判を付け、梓に描いて伊勢長島へ流送した。

③両宮から頭・頭代二人・小工四人が長島に向き、梓を受け取った。

④長島領大島から伊勢大湊までは、小工が一人ずつ梓に乗り込んだ。

⑤大湊に着くと、内宮と外宮に木分けを行った。

⑥木分けが終わると、内宮材は鹿海へ外宮材は宮川へ引き入れ、それぞれの宮域へ運んだ。

この記述によつて、御神木の伐り出しから伊勢神宮までの流送のおおまかな様子が分かる。ちなみに、「太」とは、最高の意を表す伊勢神宮の独標のことである。

また、昭和四年の式年遷宮の場合には次のように御用材の運搬が行われた。

①大正九年(一九二〇)、多いときは三三〇人の人夫で山谷落しを行った。

②大正九年、小谷狩りによつて御用材を木曾川まで運んだ。

③大正一〇年、大川狩りによつて御用材を

錦織綱場まで運んだ。大川狩りというのは、御用材を一本ずつ流す管流しのことである。

④ 錦織綱場に到着した御用材は、帝室林野局名古屋支局錦織出張所に引き渡され、ここで桟に揺かれて桑名湊の貯木場に運ばれた。

ところで、大正一〇年の大川狩りについては次のような記録が残されているが、これを見ても、御用材の流送がいかに苦勞の多い大事業であつたかが伺われる。

本曾支局上松出張所部内より伐り出された御種代木六本は坂下町猿面巻から木曾川に入れ、木曾で伐り出された御用材の大川・木曾川・松込終了までに苗木町地内の付知川渡に狩り着け、裏木曾で伐り出された御種代木予備材とともに川下げることに決定された。

一月五日、御種代木が坂下駅に到着した。駅で二泊し、翌六日、木曾川に川入れとなつた同九日、等置村地内六段に綱入れをした。

今回は貴重な材木を大量に川下けしなければならぬため、洪水に対する注意が特に大切である。第一に錦織綱場を堅固にしなればならないため、そのための材料である道具木五〇〇本余も川下けすることになった。道具木を流送し始めた同一九日に雨が降り始め、木曾川の水位が四尺以上高くなつた。そして、同二〇日午前七時、ついに流材となつてしまつた。

流材は木曾川沿岸の各地に散乱したが、幸いにも損傷が少なく、御種代木等の重要な御用材を安全な所に揚げて事無きをえ、三月三日にすべての御用材を錦織綱場に到着させることができた。

(錦織・木曾川筏流送の歴史書六・七〇頁)

大正一〇年二月一日、裏木曾から伐り出された御神木は恵那郡苗木町三郷の奉安場から木曾川に降ろされ、錦織綱場を目指して管流しが始まつた。このときは三艘の舟がともに下つたが、そのうち一艘は先に出発し、次の繋留場所でない出水に備えた。あとの二艘は御神木とともに下り、急流で岩が突き出ているような場所にさしかかると、御神木を痛めないよ



錦織綱場をへ出発になる御神木
(舟の横に付けたのが御神木。伊勢神宮に開く「太一」の旗が見られる。流域の人々にとっては20年に一度の大行事であつた)

うに麻縄で吊り下げたりしながら、次の繋留場所まで下つた。また、木曾川の要所所には人を配して、御神木の安全を期した。このときの管流しの日程と繋留場所は、次のようであつた。

一月二六日 恵那郡蛭川村奥戸の旧渡船場
一月二七日 恵那郡長島町久須見の渡船場
一月二八日 恵那郡笠置村姫栗の渡船場
一月二九日 一月二六日

恵那郡笠置村河合
一月二七日 一月二〇日

加茂郡飯地村川平塩戸の水電用水取入口付近
一月三二日 一月一日

加茂郡潮南村下立
二月二日 二月五日

加茂郡八百津町丸山
二月六日 二月七日

錦織綱場上砂場
二月七日

六 御神木の流送と流域住民

木曾川を管流しされてきた御神木は、錦織綱場に御逗留した後、八百津町の菅渡・八百津町の黒瀬湊(御逗留)・可児郡兼山町の兼山湊・可児郡伏見村の新村湊・可児郡今渡村川合・加茂郡下米田村小山・加茂郡上古井村川合・加茂郡太田町(御休止)の中川原・可児郡土田村・加茂郡坂祝村勝山・丹羽郡大山町(御逗留)・羽栗郡草井村・羽栗郡下羽栗村円城寺・羽栗郡等松町の等松湊・中島郡起町(御逗留)・桑名にお立ち寄りになったり、御逗留にあたりながら流送されていた。

御神木が流送されてきたとき、木曾川流域の人々はこのように対応したのであつた。

黒瀬湊を御神木が出発する日になると、上古井村の川合湊から太夫宿主(川庄屋) 渡辺萬兵衛方は、川合の青年三〇人余とともに御神木を黒瀬湊まで出迎えた。そして、三艘の舟に分乗して、お供に加つた。途中、兼山湊や新村湊からお供が加つた。

木曾川と飛騨川が合流する辺りには、流送されてくる御神木を一目見ようと、木曾川の両岸に大勢の人が詰めかけていた。このときは御神木の上に御幣が立てられ、数人の神官と囃し組が付添い、笛と太鼓で曲を奏でていた。御神木が近づいてくると、お年寄りは「御神木様御神木様」といつて手をあわせていたという。

川合湊に御神木が御逗留にあつてゐる間(このときは大正一〇年二月一六日は、大勢の参拝者と露店で賑わい、消防組が警護した。また、川原には、御神木の舟に飾つた紅白の吹流しや国旗が風になびいていた。そして、上古井村や加茂郡下古井村・下米田村小山・加茂郡山之上新村・加茂郡峰屋村・太田町・加茂郡加茂野村・今渡村川合等の青年が、神樂を奉納した。翌朝になると御神木の出発となるが、このときは下古井村・今渡村川合・伏見村新村・下米田村小山から、二・三艘ずつの舟に分乗したお供が出た。

ところで、川合湊では、御神木の流送にあつて川合の渡船場の石を動かして木曾川からの道と工場を造り、御逗留に備えていたといふ。

七 おわりに

二〇年に一度見られるだけの御神木の流送は、

「御神木様は、一週間くれば錦織綱場の二番土場におらせただけで、そりやあありがてえわけやな」

という古老の言葉からも伺われるように、御神木を参拝することが伊勢神宮に参拝するのと同様の意味をもっていたらしい。そのため、当時の人々は老若男女を問わず御逗留の場所や木曾川の沿岸に遠方から駆けつけ、御神木を参

拝した。

また、御神木の伐り出しや流送にあつては、責任が重い上に報酬もなかつたらしく、それぞれの作業に必要なだけの技術者の確保が困難に思われたが、伊勢神宮に対する信仰心と二〇年に一度の国家的な大事業といふことから、予定した技術者が集まつた。



完成間近(大正13年)の木曾川・大井ダム
タムの完成によって材木の流送は不可能になつた

遠方から集まつてきた大勢の人々の目を意識しながら、なんらかの形で御神木の流送に関わつた人々は、自分たちが選ばれた特別な存在であると感じ、さぞかし誇らしかつたことであつた。

ところで、御神木の流送路は、桑名湊までは建築用資材となつた材木の流送路とほとんど同一のものであつた。しかし、錦織綱場で揺かれた桟が順番に大規模な筏に編成されながら下流域に流送されたのに対して、御神木の場合は錦織綱場で揺かれた桟のままの姿で最後まで流送されていた。また、建築用資材の場合は比較的細長かつたため、操作しやすい桟を揺くことができたが、御神木は大径かつ短小であつたため、御神木で揺いた桟は大変操作しにくいものとなつた。

なお、その後は木曾川の各地に堰堤式発電所が建設されたため、伊勢神宮の御神木が木曾川から伊勢神宮まで流送されたのは昭和四年の式年遷宮が最後とあつた。

参考文献

- 『明治大正御料事業誌』
- 『和田国次郎 林野会 一九三五年』
- 『岐阜県林業史 中巻 美濃国編』
- 『岐阜県山林協会 一九八五年』
- 『恵那市史 通史編 第三巻(上) 近現代(政治・経済)』(恵那市 一九九三年)
- 『錦織・木曾川筏流送の歴史』
- 『加茂郡八百津町教育委員会・錦織綱場保存会 一九七九年』
- 『美濃加茂市史 民俗編』
- 『美濃加茂市史 一九七八年』
- 『起町史 上巻』
- 『愛知県中島郡起町 一九五四年』

民話の小箱 海水山権現

板取村

むかし、むかしのことです。

光山上人という天台宗のお坊さまが、

白谷の山中にこもって石の上に座り、一身に修業をしていました

すると、北の方の空がさあつと輝き、

不思議な気配がたちこめました。

「これは神さまのお告げかもしれない。北の山に登ってみよう」

さうそく北の山へ登った光山上人は、

條が橋というところの近くに平らな石があったので、

その上に座り、一心不乱に祈りを捧げました。

するとあら不思議

合掌している手から水がほとばしりて川に注いだと思つと

川の瀬が変わって上流へ水が流れ出しました。

そこで、こゝを上ヶ瀬と名づけました。

上人はさらに湯屋といふところまで登り山を仰ぎ見ると、

空いつぱいに神々しい光が輝くではありませんか。

驚いた上人が山の頂上から北を見ると、

海のように大きな池が満々と水をたたえていました。

その池に近づくと池の中から大蛇が現れたので

「くら化け物！正体を現せ！！」と叫んだ上人が、

数珠を投げつけました。

この数珠はなんと大蛇の目に命中。

すると大蛇の姿は消えて神さまが現れ、

「私は海水山権現である。この山にお宮を建てて私を祀れば、

どんな願いでも叶えてあげよう」

というお告げを残し、山の中にかき消えました。

そこで光山上人はお宮を建てて海水山権現をお祀りしました。

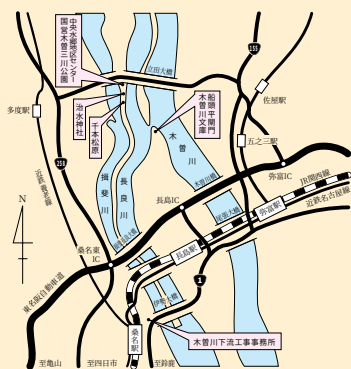
板取村の川や谷の水が澄んで美しいのも

この権現さまのおかげなのでしょう。

板取村には光山上人が座つて修業をしたと伝えられる光山石が白谷区
の観音洞、門出洞のオオイオ、上ヶ瀬の北はすれの文助林、
岩本区の藤巻、杉原ばきのヨコワタリに残されています。



木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・
木曽川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報などをお知らせください。

宛先 「KISSO」編集 FAX.(052)571-8627

今号の編集にあたって、板取村のみなさん及び松田千晴氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。

環境保全や地域づくりで活躍する板取村人々のお話から、改めて、自然の大切さや素晴らしい実感をすることができました。ありがとうございました。

次回は、桑名市を特集します。

木曽川文庫ホームページ

<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

●表紙写真●

左：川浦溪谷

右上：株杉 右下：あじさいまつり

『KISSO』Vol.38 平成13年4月発行

発行：国土交通省中部地方整備局木曽川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨字沢南81 TEL (0594) 24-5715

木曽川下流工事事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル） TEL (052) 565-1976